B5-1

気管カニューレによる気管内肉芽のある遷延性意識障害患者へのポジショニングの検討

○西脇 由佳[1]、日下部 裕子[1]、兼松 由香里[1]、石山 光枝[1]、野村 悠一[2]、米澤 慎悟[2]、浅野 好孝[2]、篠田 淳[2]

[1]木沢記念病院 中部療護センター 看護部、[2]木沢記念病院 中部療護センター 脳神経外科

【目的】当センター先行研究では、カニューレ留置患者の約38%で気管内肉芽の発生が確認された。カニューレの接触が肉芽発生の要因の一つとなっている事が考えられ、適切なカニューレ選択を試みたが、材質や形状など様々な種類があり、カニューレ選択のみでは対応できていないのが現状であった。今回、気管内肉芽の出来ている患者に対して、一人一人に合ったポジショニングを含めた体位・ケアの検討を行い肉芽の改善に努めた。

【方法】当センター入院中で内視鏡にて肉芽が見つかった患者6名。Yガーゼや枕使用し、各患者のポジショニングを検討。むせ込みの軽減、痰の減少、出血の有無、閉塞音の消失、脈拍数の安定など観察。内視鏡にて変化を観察し、有効性について評価。

【結果】肉芽は4名が前壁、2名は側壁に発生。定期的に内視鏡を行い肉芽の状態を観察し、肉芽に当たらないポジショニングを選択、頸部のポジショニングやガーゼの枚数を変更しそれぞれの患者に合った対応する事で、むせ込みの軽減、痰の減少、出血減少、閉塞音消失、肉芽縮小・消失を認めた。

【考察】適切なカニューレ選択に加え、ポジショニングの検討が必要と考えられた。ポジショニングの変化によって、気管壁へどのように影響があるのか調べることで、肉芽発生予防にポジショニングが重要であることが明らかになった。時にカニューレの接触により、気管内が損傷し腕頭動脈を傷つけ、穿孔することにより最悪の事態になる。日々の生活の中で出来るポジショニングを検討する事は、むせ込み軽減に繋がり、肉芽改善に有効である。むせ込みの軽減、痰の減少、出血の有無、閉塞音の消失、脈拍数の安定は、肉芽改善・早期発見の指標となる。